

海域の概要

本湖は、北海道西部、網走の北側に存在する汽水湖です。湖の周囲は、サンゴ草の群生地として有名です。湖内では、ホタテの稚貝の育成が行われています。

Specification諸元

湾口幅：0 3 2 4 k m

面積：5 9 k m<sup>2</sup>

湾内最大水深：2 1 m

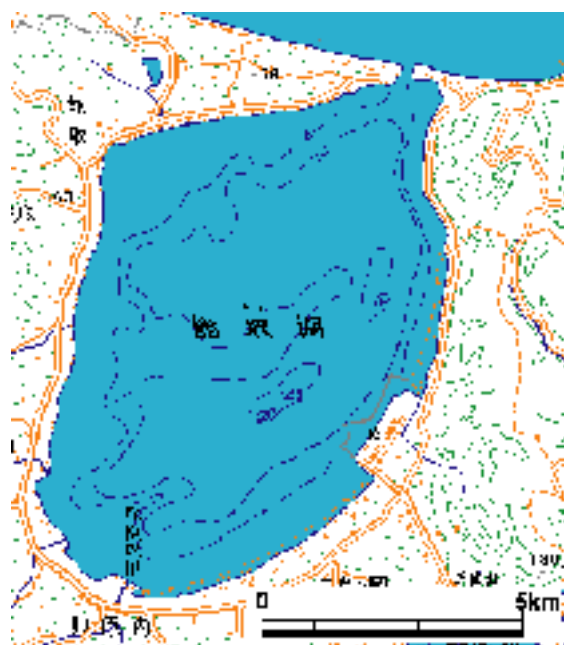
湾口最大水深：1 0 m

閉鎖度指標：4 9.7 9

備考：環境基準類型指定水域

Location範囲または位置

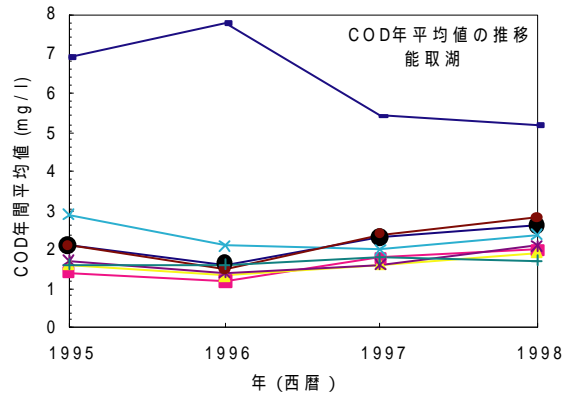
北海道網走市。



環境

能取湖は、オホーツク海と水路でつながれた汽水湖で、外海水との海水交換はあまり多くありません。

COD 年平均値の推移をみると、河川流入点で 5mg/l 以上の高い値で推移している他、その他の地点でも 2mg/l 以上となることが多くなっています。



自然

能取湖は、オホーツク海沿岸の砂丘とその発達によってできた七つの海跡湖の一つで、網走国定公園に指定されています。

湖内では、湖岸に沿ってアマモ場が分布する他、干潟もあり、春から夏にかけて潮干狩りの名所ともなっています。

東岸の能取岬には、特定植物群落である能取岬トドマツ林が分布する他、湖のほとりにはさまざまな植物が群生し、四季の移り変わりの中で、鮮やかに変化する大自然のモザイク模様を見ることができます。



サンゴ草

オホーツクの空がひとときわ青く澄みわたる9月中旬、湖畔は赤いサンゴ草のじゅうたんが敷きつめられ、空の濃いブルーとのコントラストが幻想的光景をかもし出します。サンゴ草は学名を「アッケシソウ」といい、塩湿原に生える背の低い一年草で、その色や形が珊瑚に似ていることからサンゴ草とよばれています。能取湖畔は平成3年に「日本一のサンゴ草群落地」の宣言をしました。

文化歴史

大正2年、近傍の網走川河口左岸の平地の地中から、従来とは全く異なった千年ほど前の遺跡が発掘され、この地をモヨロ貝塚と命名しました。モヨロ貝塚は住居跡、墓をともなう集落の遺跡で、縄文文化晩期以降、続縄文文化、擦文、オホーツク、近世アイヌの各文化期にわたるものが出土しています。



モヨロ貝塚

産業

能取湖では、ホタテ養殖の他、シジミやワカサギ等の漁が行われています。

また、能取湖地先のオホーツク海では、毎年押し寄せる流水によって、大量のプランクトンが運ばれるために多くの魚が集まり、活きのいい海産物の宝庫(カニ、ホタテ、サケ)となっています。

湖岸には、沿岸や内水面漁業の振興を図る水産科学センターが設置され、地域産業の振興に努めている他、カレイの一種「マツカワ」を栽培漁業の有望種として飼育研究するなどの試みも行われています。